

## ブロック先生の最終講義に寄せて

フランソワーズ・坂井・ブロック先生が、東京大学文学部法文2号館の一大教室で、" Excuse et Littérature " と題する最終講義を行われたのは、1991年3月20日だから、それからまもなく4年の歳月が流れさろうとしている。ブロック先生は、33年にわたって外国人教師として文学部で教鞭をとられた。これは、少なくとも戦後の本郷仏文のスタッフの中では、ずば抜けて長い在籍記録であり、われわれのように先生の教えを受けた世代の学生にとっては、先生のおられない仏文研究室は想像もつかなかったし、また先生を知らない学部学生さらには大学院生が出現し始めたことも、信じられない気がする。

先生は1955年来日された。エコール・ノルマル・スーペリユール出身で古典文学教授資格を持つうら若い才媛が日本の大学で教鞭をとるといのは、今日でこそさほど珍しいことではないかも知れないが、まだ敗戦の痛手を色濃く留めていた当時の日本では破天荒の出来事であった。先生ご自身、講義のなかで触れておられるように、先生は、外国人教師という、少なくとも義務の点では専任に限りなく近い身分の教員として、東大の正規の授業を担当した最初の女性かも知れないのである。このような僥倖が生じたのは、先生が原子物理学者の坂井光夫先生とパリで出会い、結婚して日本で家庭を築くことを決意されたからである。「日本のフランス文学関係者は、ブロック先生を日本に連れてきた坂井先生に深い恩義がある。感謝状を贈らなくては」とは、最終講義の後のパーティーの席でも話題になっていた通り、駒場の前田陽一先生の口癖であったが、これは先生に教えを受けたもの全員の偽らざる実感だろう。先生は優に一世代の学生を育成し、戦後の日本のフランス文学研究に決定的な影響を及ぼされたのである。

先生の明晰で繊細かつ滋味にあふれた授業が、どれほど代々の学生たちを魅了したか、くだくだしく語る必要はあるまい。この「最終講義」がその面影を

遺憾なく伝えているのだから。モンテーニュからブルーストさらにはカミュに至る近代フランス文学の宝を自家薬籠中のものとした上で、文学作品の序文と本文の中に現れる作者の「言いわけ」、あるいはまた作中の人物や事件の美的・道徳的価値に対する作者の距離の取り方について、透徹した分析が施されるこの講義は、もちろん独創的で優れた研究であるが、そればかりでなく、同時に先生ご自身が文学と文学教育に寄せる含羞の愛情についての気品あふれる「言いわけ」——しかしそれは信仰告白と紙一重である——ともなっており、それがわれわれの胸を打つ。実際、先生のお話においては、人間と作品に対する愛情あふれる好奇心と、恥じらいと醒めた眼差しが微妙に交錯しているように思われる。

しかし活字になった講義だけでは、分からないこともある。それは先生が、類まれな聞く耳を持っておられることであった。先生は、われわれの稚拙なフランス語に、さらには沈黙にさえ耳を傾けて下さった。外国語で自分の考えと思いを伝えられない学生のもどかしさを、先生ほど理解し尊重された例を他には知らない。教室で、大学院入試やフランス政府留学生試験の口述試験の場で、先生は、つかえては口ごもる学生の言葉に注意を集中され、そこに何か本物の感動と思想の芽生えが顔を覗かせるのを辛抱強く待ち受けられるのだった。それは、ソクラテスのいう精神の産婆術を彷彿とさせる、恐ろしい試練でもあれば、大いなる救いでもあった。教育が、知識の授受に留まらず、学生のうちに潜む可能性を引き出す企てであるという意味で、先生はまさに比類のない教育者である。

この最終講義を活字で読みたいという要望は、講義の直後から寄せられていた。その実現が今日まで遅延したのは、もっぱら『仏語仏文学研究』と先生の仲介役を務めた筆者の怠惰のせいである。この点、先生と読者には深くお詫び申し上げる。なお、この講義の邦訳の公刊の企画も現在進行中である。

先生は、この3月、二度目のお勤めであった慶應義塾大学を退職され、悠々自適の生活にお入りになると伺っている。来日されてから丸40年、1年たりとも休暇を取らずに働いてこられた先生に、伸びやかで実り豊かな閑暇の日々、

古代ローマの文人のいう *otium litteratum* が末永く続くことを心からお祈りしたい。弟子の口から言うのも僭越だが、先生ご自身講義の結びで述べておられるように、「言いわけと文学」は恰好の研究テーマとして先生の閑暇を待ち受けているのではないだろうか。それに失礼序でにもう一つ。先生には、フランスでの生い立ちと日本で生活と教育体験を二本柱とする回想あるいは自伝を執筆していただけないものだろうか。控えめで謙遜、そして何よりもモンテーニュ、ルソーやスタンダールの愛読者として、自己を語ることの困難と畏に精通しておられる先生が、おいそれと話に乗ってこられないのは、よく承知している。しかし先生の体験してこられたことは、一個人の枠を越えて、われわれフランス文学研究者はもとより、民族と文化と国家の関係に関心を抱く者すべてに大きな示唆を与えずにはおかないはずである。いや、そんなこと以前に、ブロック先生の「自己描写」は、各人のうちに潜む「人間存在のまったき形」（モンテーニュ）を明らかに示して、読者にテキストの快樂を存分に味わわせてくれるに違いない。出過ぎた真似かもしれないが、心よりお願い申し上げる次第である。先生のますますのご健勝をお祈りするとともに、今後とも、弟子のわれわれを見守り、お導き下さるよう希いつつ筆を置く。

最後に、編集の実務については、助手の菅野賢治氏の尽力があったことを申し添える。

1995年 2月18日

塩川 徹也